

家族生活空間としての和室に関する研究

第1報 集合住宅における家族生活空間の使われ方

日本女大 沖田 富美子

〔目的〕生活の洋風化にともない、住宅の平面構成も洋室を中心としたものが多くなっている。しかし畳の部屋（和室）が欲しいという要求から、1室は和室で構成された住宅が一般化しているのも事実である。今後の住宅平面計画における和室の位置づけを明らかにするための資料を得ることが本研究の目的である。本報では集合住宅におけるリビングダイニング（リビングまわりL、ダイニングまわりD）と和室の使われ方について報告する。

〔方法〕横浜市及び首都圏の集合住宅居住者を対象に無作為抽出によるアンケート調査を実施した。調査配布数は284件、回収数115件、有効回答数は108件である。なおこのうち住まい方調査が可能となった46件（3LDK22件、4LDK24件）について分析する。調査時期は1998年8月。本調査に用いた生活行為は11グループ39行為である*（表省略）。

〔結果〕1）全体的にみると生活行為11グループ中〈日常食〉〈勉強・仕事〉〈家事1〉グループの多くの行為が、主として家族生活空間のうちのDまわりで、〈娯楽〉〈読み物・書き物〉グループの行為及び〈休息・会話〉グループの多くの行為はLまわりで、〈身だしなみ〉〈家事2〉グループの行為は和室で行われている。2）3LDKと4LDKでは、3LDKの方が一つの行為を1室だけでなく複数の室にわたって行っている。またL、Dまわりで行われる行為は3LDKの方が多いが、和室では3、4LDKともに同じような行為が行われている。3）集合住宅、戸建住宅*ともにほぼ同じような行為がL、Dまわり、和室でそれぞれおこなわれているが、Lまわり、和室で行われる行為は戸建て住宅の方が少ない。*日本建築学会大会学術講演梗概集 1998.9 P189～P192 の結果による。